

埼玉県学力・学習状況調査（中学校）

復習シート 第一学年 国語



組	番号	名前

【「言葉」を問う問題】

1 次の文の 線部に対する主語を抜き出して書きなさい。

レベル9

① 姉がくれたハンカチはとてもかわいい。

② あれは祖父が野球場で撮った写真だ。

2 次の 線部の敬語の使い方として、正しいものをア～エの中からすべて選びましょう。

レベル7

ア 先生が、絵をご覧になられる。

イ お客様が、めしあがるお茶。

ウ 校長先生に意見を申し上げる。

エ 私の父が、こうおっしゃる。

3 次の熟語と構成（成り立ち）が同じ熟語を の中から一つずつ選び、記号を書きましよう。（二回以上 入る記号もあります。）

レベル9

① 収支

② 不正

③ 存在

④ 強敵

⑤ 除草

⑥ 玉石

ア 正誤 イ 洗顔 ウ 永久 エ 温泉 オ 未定

埼玉県学力・学習状況調査（中学校）

復習シート 第一学年 国語



組	番号	名前

【「話すこと・聞くこと」を問う問題】

1 星野さんの学級では、地域で働く人の仕事内容や思いを知るために、和紙職人である

小林さんへインタビューをすることになりました。そこで星野さんの学級では、インタビューの内容を話し合いで決めることになりました。次はその【話し合いの様子の一部】です。これをよく読んで、あとの問いに答えましょう。

【話し合いの様子の一部】

星野 みなさんがインタビューしたいことが黒板に書かれています。しかし、インタ

ビュー時間は十五分しかないので、内容をしばっていくのはどうでしょうか。

鈴木 そうですね。では黒板に書かれたことを分類してから検討するのはどうでしょうか。

佐藤 賛成です。それでは、和紙職人の仕事内容と小林さんの思いに分けるのはどうでしょうか。

星野 そうすると、① ② は、内容や思いに入らないので、しない質問に入れていいと思います。

→ 分類をする

鈴木 では、黒板のように整理できそうですね。

→ 話し合いが続く

【黒板のメモ】

小林さんに聞きたいこと

- ・どんな思いで仕事をしているのか。
- ・和紙を作る工程はどんなものか。
- ・和紙にはどんな種類があるのか。
- ・和紙を作る上で大変なことは何か。
- ・小林さんは中学校時代にどんな学生だったか。
- ・和紙職人として嬉しいことは何か。
- ・何時から仕事をしているのか。

（1）【①】に入るものとして、ふさわしいものをあとの1～4の中から選んで、その番号を書きましよう。

レベル9

- 1 和紙を作る工程はどんなものか。
- 2 小林さんは中学校時代にどんな学生だったか。
- 3 どんな思いで仕事をしているのか。
- 4 和紙職人として嬉しいことは何か。

（2）左は、星野さんたちが実際に質問内容を分類したものの一部です。②にはどのような言葉が入るかを【話し合いの様子の一部】から書き抜きましよう。

レベル9

質問の種類	質問内容
②	・和紙にはどんな種類があるのか。 ・何時から仕事をしているのか。
小林さんの思い	・和紙を作る上で大変なことは何か。

復習シート 第一学年 国語



組	番号	名前

【「読むこと」を問う問題】

- 1 次の文章を読んで、問題を解きましょう。

二月のある日、野中のさびしい道を、十二、三の少年と、皮のかばんをかかえた三十四、五の男のひとが、同じ方へ歩いていった。

【中略】

「おじさんのポケット、なんだか、かたい冷たいものがはいつているね。これなに？」

「なんだと思う」

「かねでできてるね……大きいね……なにか、ねじみたいもんがついてるね」

するとふいに、男の人のポケットから美しい音楽が流れだしたので、ふたりはびつくりした。男の人はあわてて、ポケットを上からおさえた。しかし、音楽はとまらなかった。それから男の人は、あたりを見まわして、少年のほかにはだれも人がいないことを知ると、ほつとしたようすであつた。天国で小鳥がうたつてでもいるような美しい音楽は、まだつづいていた。

「おじさん、わかった、これ時計だろう」

「うん、オルゴールつてやつさ。おまえがねじをさわったもんだから、うたいだしたんだよ」

「ぼく、この音楽だいすきさ」

【中略】

そこで、また男の人のポケットがうたいはじめた。

ふたりはしばらくその音をききながら、だまって歩いた。

「おじさん、こんなものを、いつも持って歩いてるの」

「うん、おかしいかい」

「おかしいなア」

「どうして」

「ぼくがよく遊びに行く、薬屋のおじさんのうちにも、うた時計があるけどね、だいにして、店のちんれつだなの中に入れてあるよ」

「なんだ、坊、あの薬屋へ、よく遊びに行くのか」

「うん、よくいくよ、ぼくのうちの親類だもん。おじさんも知ってるの？」

「うん……ちよつと、おじさんも知ってる」

「あの薬屋のおじさんはね、そのうた時計をとでもだいにしててね、ぼくたち子どもに、なかなかさわらせてくれないよ……あれッ、またとまっちゃった。もう一ぺん鳴らしてもいい？」

「きりがいいじゃないか」

「もう一ぺんきり。ね、おじさんいいだろ、ね、ね。あ、鳴りだしちゃった」

「こいつ、じぶんで鳴らしといて、あんなことやってやがる。ずるいぞオ」

「ぼく、知らないよ。手がちよつとさわったら、鳴りだしたんだもん」

「あんなことやってやがる。そいで坊は、その薬屋へよくいくのか」
ぼう

「うん、じき近くだからよくいくよ。ぼく、そのおじさんとなかよしなんだ」

「ふうん」

「でも、なツかなか、うた時計を鳴らしてくれないんだ。うた時計が鳴るとね、おじさんは、さびしい顔をするよ」

「どうして？」

「おじさんはね、うた時計をきくとね、どういうわけか周作しゅうさくさんのことを思い出すんだって」

「えッ……ふうん」

「周作って、おじさんの子どもなんだよ。不良少年になつてね、学校がすむと、どつかへいっちゃったって。もうずいぶんまえのことだよ」

「その薬屋のおじさんはね、その周作……とかいうむすこのことを、なんとか知っているかい？」

「ばかなやつだって、いつてるよ」

「そうかい。そうだなあ、ばかだな、そんなやつは。あれ、もうとまったな。坊、もう一度だけ、鳴らしてもいいよ」

「ほんと？……ああ、いい音だなあ。ぼくの妹のアキコがね、とつても、うた時計がすきでね、死ぬまえに、もう一ぺんあれをきかしてくれて、ないてぐずったのでね、薬屋のおじさんとこから借りてきて、きかしてやったよ」

「……死んじやったのかい？」

「うん、おとしのお祭のまえにね。やぶの中のおじいさんのそばにお墓があるよ。川原から、おとうさんが、このくらいのまるい石をひろってきて立ててある、それがアキコのお墓さ、まだ子どもだもんね。そいでね、命日に、ぼくがまた薬屋からうた時計を借りてきて、やぶの中で鳴らして、アキコにきかしてやったよ。やぶの中で鳴らすと、すずしいような声だよ」

「うん……」

【中略】

「おじさんも小さいとき、よくこの道をかよったの？」

「うん、町の中学校へかよったもんさ」

「おじさん、また帰ってくる？」

「うん……どうかわからん」

道がふたつにわかれているところにきた。

「坊はどっちイいくんだ」

「こっち」

「そうか、じゃ、さいなら」

「さいなら」

少年はひとりになると、じぶんのポケットに手をつつこんで、ぴよこんぴよこんはねながらいった。

「坊ウ……ちよつと待てよオ」

遠くから男の人がよんだ。少年はけろんと立ちどまって、そっちを見たが、男の人が

しきりに手をふっているのです、またもどっていった。

「ちよつとな、坊^{ぼう}」

男の人は、少年がそばにくと、少しきまりがわるそうな顔をしていった。

「じつはな、坊、おじさんはゆうべ、その薬屋のうちでとめてもらったのさ。ところがけさ出るとき、あわてたもんだから、まちがえて、薬屋の時計を持ってきてしまったんだ」
「……………」

「坊、すまんけど、この時計とそれから、こいつも（と、がいとう（※1）の内かくしから、小さい懐中時計（※2）をひっぱり出して）まちがえて持ってきたから、薬屋に返してくれないか。な、いいだろう？」

「うん」

少年はうた時計と懐中時計を、両手にうけとった。

「じゃ、薬屋のおじさんによろしくいつてくれよ。さいなら」

「さいなら」

「坊、なんて名だったつけ」

「清廉^{せいれん}潔白^{けつぱく}の廉^{れん}だよ」

「うん、それだ、坊はその清廉……なんだっけな」

「潔白だよ」

「うん潔白、それでなくちゃいかんぞ。そういうりっぱな正直なおとなになれよ。じゃ、ほんとにさいなら」

「さいなら」

少年は、両手に時計を持ったまま、男の人を見送っていた。男の人はだんだん小さくなり、やがて稲積^{いなづみ}（※3）のむこうに見えなくなってしまった。少年はてくてくと歩きだした。歩きながら、なにかふにおちないものがあるように、ちよつと首をかしげた。まもなく少年のうしろから自転車が一台、追っかけてきた。

「あッ、薬屋のおじさん」

「おう、廉坊^{れんぼう}、おまえか」

えりまきであごをうずめた、年よりのおじさんは、自転車からおりた。そしてしばらくのあいだ、せきのためものがいえなかった。そのせきは、冬の夜、枯木^{かれき}のうれ（※4）をならす風の音のように、ヒュウヒュウいった。

「廉坊、おまえは村から、ここまでできたのか」

「うん」

「そいじゃ、いましてがた、村からだれか男の人が出てくるのと、いっしよにならなかったか」

「いっしよだったよ」

「あッ、そ、その時計、おまえはどうして……」

老人は、少年が手に持っているうた時計と懐中時計に目をとめていった。

「その人がね、おじさんの家でまちがえて持ってきたから、返してくれっていったんだよ」
「返してくれろって？」

「うん」

「そうか、あのばかめが」

「あれ、だれなの、おじさん」

「あれか」

そういつて老人は、また長くせきいった。

「あれは、うちの周作だ」

「えッほんど？」

「きのう、十なん年ぶりで、うちへもどってきたんだ。ながいあいだ悪いことばかりしてきたけれど、こんどこそ改心して、まじめに町の工場ではたらくことにしたから、といってきたんで、ひと晩とめてやったのさ。そしたら、けさ、わしが知らんでいるまに、もう悪い手くせを出して、このふたつの時計をくすねて出かけやがった。あのごくどうめが」
「おじさん、そいでもね、まちがえて持ってきたんだってよ。ほんとにとつていくつもりじゃなかったんだよ。ぼくにね、人間は清廉潔白せいれんけつぱくでなくちやいけないっていったよ」

「そうかい。……そんなことをいつていったか」

少年は老人の手にふたつの時計をわたした。うけとるとき、老人の手はふるえて、うた時計のねじにふれた。すると時計は、また美しくうたいだした。

老人と少年と、立てられた自転車かれのが、広い枯野かれのの上にかげを落として、しばらく美しい音楽にきき入った。老人は目になみだをうかべた。

少年は老人から目をそらして、さつき男の人がかくれていった、遠くの、稲積いなづみの方をながめていた。

野のはてに、白い雲がひとつういていた。

※1がいとう……寒さや雨を防ぐために洋服の上に着る衣服。オーバー。

※2懐中時計……ポケットに入れて携帯（けいたい）する小型の時計。くさりやひもなどをつける。

※3稲積……かり取った稲（いね）を積み重ねたもの。

※4うれ……草のくきや葉の先。木の幹や枝の先。

（新美南吉『うた時計』出典）

（1）「うた時計」の音色は、どのように表現されていますか。

に当てはまる言葉を

探して書き抜きましょう。

レベル9

音楽

声

（2）少年の名前の「廉」の「清廉潔白」とおおよそ同じ意味の四字熟語（類義語）を次の1～4の中から一つ選びましょう。

レベル6

- 1 日進月歩（にっしんげつぽ）
- 2 才色兼備（さいしよくけんび）
- 3 品行方正（ひんこうほうせい）
- 4 七転八起（しちてんはつき）

（3） 男の人（周作）は、少年（廉）に三回「さいなら」と言っています。「さいなら」の言葉を発したときの男の人（周作）の気持ちや思いを説明したものととして、最も適切なものを選びましょう。

レベル8

- 1 自分の今までの行動をふり返り、心を改めたいと思い、さらに少年を応援したい。
- 2 「さいなら」と言ったけれど、まだなごりおしく、伝えたいことがある。
- 3 少年と道がちがうことが分かり、お別れだなと思った。

「さいなら」一回目

二回目

三回目

（4） 原さんの学級では、物語を読み、心に残ったところについて、交流しています。原さんは、その理由について、のところで周作の心情の変化を伝えています。三十字以上六十文字以内で書きましょう。

レベル9

原さん 「私は、周作が廉に『清廉…潔白でなくちゃいかんぞ。そういうりっぱな正直なおとなになれよ。』と伝えたところが心に残ったんだ。」

島さん 「なぜ、そこが心に残ったの。」

原さん それは、

「周作の心情が変化して、心を動かされたよ。最後の方で、周作は、自分に言い聞かせるように廉に『清廉…潔白でなくちゃいかんぞ。』と、言ったのではないかと思ったよ。」

「島さんの心に残ったところは、どこだった。」

島さん 「最後のところだよ。周作が、父親のうた時計を持って行ってしまったけれど、それを返すところがよかったな。親には面と向かって返すことができないはずかしさや後ろめたさを感じ、共感したよ。そして、周作の父親が音楽を聞き、目になみだをうかべたところも印象に残ったよ。」

原さん 「そうだね。そこもとても良いね。」

[illegible]

60

30

条件

- ・◆の印から書き、段落はつけない。
- ・周作の心情の変化が分かるように書く。